

女真文字談義 (5)

—現代満州語口語の二項対立子音、アルタイ諸語のsの音質など—

吉池孝一

解説が必要な東アジアの“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物の設定は次のとおり。

佐藤久美^{きとうくみ}：学生。歴史一般に関心がある。

山村健一^{やまむらけんいち}：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

安井教授^{やすい}：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに金朝の言葉と文字の勉強をはじめた。

〈第5回目〉

《音韻観念の続き》

山村健一：前回は、人の記憶のなかに実在する“音韻観念”（有坂秀世氏^{ありさかひでよ}に従い〔 〕としたが、これよりは{ }とする）と¹、音韻観念の実現である生理的物理的な“音声”（[]）と、意味の区別に役立つ単位として音声を解釈して求めた“音韻”（/ /）の三種がある、ということを確認しました。

佐藤久美：音韻は解釈ですから、その“最少の単位”はどのようにでも設定できます。しかし音韻観念は、このような単位で実在しているに違いない、と想定するものです。有坂秀世氏は、{m}と表記しますので、単音を最少単位と想定したようです。

山村健一：それに対して、佐藤さんは、{ma} や{mi}のように、音韻観念の最少単位は自然に発音できる単位であろうと考えましたね。私も賛成です。

佐藤久美：発音の理想や目的観念は、だれもが発音し確認できる単位として実在するのではないかと思うのです。

安井教授：日本語と違って、二重子音^{にじゅうしおん}をもつ言語や、音節末^{おんせつまつ}に各種の子音を持つ言語の場合、“自然に発音できる単位”がどのようなものか“自然に認識できる単位”がどのようなものか、今の私たちにはわかりません。場合によっては、子音だけを聞き分け、それによって音韻観念を作り上げることができるかもしれません。今回の勉強会では、とりあえず{m}などと表記することもできる、としておきたいのですが、いかがでしょうか。

佐藤久美：はい。とりあえず、便宜として、ということでしたら、それでいいと思います。

¹ 音韻観念の所在について有坂氏は“脳中”に実在すると表現するが、ここでは“記憶”のなかに実在とした。

山村健一：ところで、過去の言語については、音韻観念を直接に観察することはできません。どうしたらいいのでしょうか。

安井教授：①その言語を表記した文字、②対音資料（その言語を表記する文字で他の言語を表記した資料、他の言語を表記する文字でその言語を表記した資料）、③文献中に散見される言語についての記述、④その言語と同系統と推定される現代諸方言などから推察するという事ではないでしょうか。

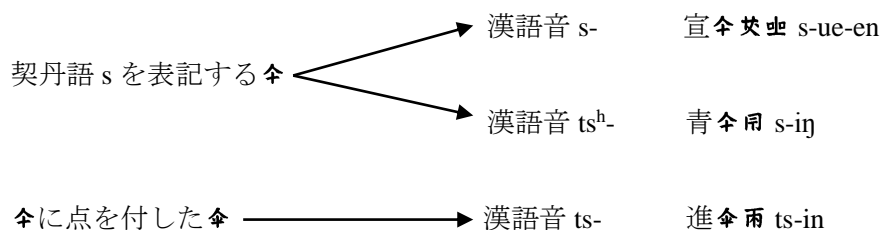
山村健一：それは“音韻”を求める作業と同じですね。

安井教授：アプローチは似ていますが、目的が異なります。音韻観念は、最終的には、“実在した発音上の習慣”として容認できるかどうか、というところが重要となります。理にかなった音韻体系という点からみて、不都合であってもかまわないわけです。

《契丹語の音韻観念》

山村健一：前回の勉強会では、契丹語の破裂音と破擦音の音韻観念は、{p^h}と{p}、{t^h}と{t}、{k^h}と{k}（以上は破裂音）、{ʃ^h}と{ʃ}（以上は破擦音）であったとし、両者を区別する主要な特徴は、発音の際に息を伴うか（有気音）、伴わないか（無気音）であるとしました。それは、漢語音の ts- ts^h- s- をどのように文字表記したかということをも参考にして求めたものです。

佐藤久美：遼朝での、漢語音の ts- ts^h- s-の表記の仕方には偏りがありました。𐰽で s- ts^h- を表記し、𐰽に点を付して新たに𐰽をつくって漢語音の ts- を表記しました。



*用例は、宣懿皇后の「宣」、御院通進の「進」、銀青崇祿の「青」。これらは「宣懿皇后哀冊」の拓本による²。契丹小字の音価は「《契丹小字釋讀問題》（修訂本）」『清格爾泰文集 第5卷』（2010年、内蒙古出版集團、内蒙古科學技術出版社）による。

山村健一：摩擦音の s- を、息の持続があるので有気音の仲間に入れます。そうすると、有気音の s- ts^h- と無気音の ts- の違いにしたがって、𐰽 と 𐰽 を振り当て区別をして

² 宣懿皇后哀冊では、𐰽で s- ts^h-、𐰽で ts-、という書き分けが完全に行われており、𐰽で ts- を併記することはないようだ。「古代文字資料館」所蔵の拓本による。

いることとなります。このような区別は、息の有無によって音を区別する発音上の習慣（音韻観念）をもっていて、それが反映したものと考えられます。

佐藤久美：それで、山村君は、ふつうには p と b、t と d、k と g、ʃ と ɟ と表記される契丹語の子音について、主要な発音の区別は清濁ではなく、実は気音の有無にあったのではないか。その音韻観念は、{p^h}と{p}、{t^h}と{t}、{k^h}と{k}、{ʃ^h}と{ʃ}であったのではないかと考えたわけですね。このような有気音と無気音によって音を区別する発音上の習慣（音韻観念）が先にあって、それが漢語音の ts- ts^h-s- の表記の仕方に反映したと考えたわけですね。

つぎに問題となるのは、女真語はどうであったかということです。そろそろ本題の女真語と女真文字の話に入りたいのですが、いかがでしょう。

安井教授：佐藤さんは不満かもしれませんが、提案があります。女真語は、満州語と関係が近いとされています。満州語の口語は現代でも話されていますので、先ず現代の満州語口語を検討したらどうでしょうか。次に時代をさかのぼって満州語文語など古い満州語の状況を見て、それから女真語をみる、という順序で進めるのはいかがでしょうか。

佐藤久美：少しまわりくどいような気もしますが、実感をもてる確実なところからやりましょう、ということですね。

安井教授：満州語の口語については、まずは服部四郎・山本謙吾（1956）と清格爾泰（1982）と愛新覺羅 烏拉熙春（1992）を確認しましょう。

《満州語口語の二項対立子音①》

安井教授：服部四郎・山本謙吾（1956）は³、新疆ウイグル自治区伊犁地方の錫伯族出身のインフォーマントに対する調査です。破裂音と破擦音の/p/と/b/、/t/と/d/、/k/と/g/、/q/と/g/、/c/と/j/を二項対立子音として挙げ、前者を強音（tense）とし、後者を弱音（lax）とします。

■強音は、閉鎖と呼気が強くそのため破裂の騒音が強いことが特徴であるとします。その音声は無声の有気音とのことです。たとえば、

「綿入れの長い上衣」[p^ham p^h]⁴

語末において母音ではじまる単語が結合して合成語となると、気音が無いということ。たとえば、

「事件」[bait^h] > 「大丈夫」[bait-aqw^h]

「はだか」[fiaqw^h] > 「はだかになる」[fiaqw-om]。

³ （1956）「満州語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』30：1—29。（1989）『服部四郎論文集3 アルタイ諸言語の研究Ⅲ』1—55，東京：三省堂。

⁴ 有気音は[p^ʰ]と表記されているが、ここでは便宜的に[p^h]として表記する。

■弱音は、閉鎖と呼気が弱くそのため破裂の騒音が弱いことが特徴であるとします。その音声は無気音ですが、語頭（発話の頭位）・発話の末位および無声音の前では、前半部が無気の半有声音となるとのことです。たとえば、

「場所」[p̥aː]（下の丸は半有声を表す）

「峰」[xɑŋ]

「丁度」[tʰoŋsɜm]

有声音の間では有声音になるということです。たとえば、

「ポケット」[vadən]

山村健一：強音・弱音と、有声・無声、有気・無気とは、どういう関係なのでしょう。

安井教授：強音と弱音が、子音を区別する主な特徴であり、有声・無声及び有気・無気は、余分な特徴とします。

山村健一：思うに、子音を区別する主な特徴を、強音と弱音ではなく、有気と無気としても、問題はないとおもうのですが。

佐藤久美：その場合、弱音の系統の子音が、半有聲とか有声音で現れる事実を、どのように説明するのですか。

山村健一：弱音の系統の子音は、調音の閉鎖が弱い(閉鎖が柔らかく持続時間が比較的長い)ため、前後の音の影響を受けて、自然に有声音化するだけで、有声音を発音しようと意図しているわけではない。意図しているのは無気音だということです。

安井教授：強音 (tense) と弱音 (lax) という考え方は、アルタイ諸語の破裂音と破擦音の二項対立子音を説明する際によく使われます。音声の分析としてはともかく、音韻観念としては明瞭でないところがあります。

《満州語口語の二項対立子音②》

佐藤久美：清格爾泰 (1982) ⁵ではどうでしょうか。

安井教授：清格爾泰 (1982) は、1961 年から中国の黒龍江省富裕県の三家子で行われた調査で、1982 年に公表されました。破裂音と破擦音の、b と p、d と t、g と k、g と q、dz と tʂ、dz と tɕ を二項対立子音として挙げ、前者の b d g g dz dz を半有聲の無気音とし、後者の p t k q tʂ tɕ を無聲の有気音とします。両者を、無気音と有気音の対立と見ていることは、子音の図表から明かです。

山村健一：音韻（発音の分布から解釈したもの）は、/p/と/pʰ/, /t/と/tʰ/, /k/と/kʰ/, /q/と/qʰ/, /tʂ/と/tʂʰ/, /tɕ/と/tɕʰ/ということでしょうか。

⁵ 清格爾泰(1982)「満州語口語語音」『内蒙古大学学報（哲学社会科学版）』。(1998)『清格爾泰 民族研究文集』232-355, 北京：民族出版社。

安井教授：g と g、k と q は、後続する母音の違いによるもので、一つの音韻とします。
また、dz と dz、tʂ と tʂ も、後続する母音の違いによるもので、一つの音韻とします。

山村健一：そうしますと、音韻は/p/と/pʰ/、/t/と/tʰ/、/k/と/kʰ/、/tʂ/と/tʂʰ/ということになりますね。

安井教授：そうです。服部四郎・山本謙吾（1956）の伊犁方言とはやや異なりますが、それが方言の違いによるものか、解釈の違いによるものかわかりません。

佐藤久美：清格爾泰（1982）はどのようにして、実際の音声と異なる「b と p、d と t など」の表記を採用したのでしょうか。

安井教授：それは便宜的な措置だと明言しています。

山村健一：それでは、話者の音韻観念としては、{p}と{pʰ}、{t}と{tʰ}、{k}と{kʰ}、{q}と{qʰ}、{tʂ}と{tʂʰ}、{tʂ}と{tʂʰ}としておけば良いということですね。

安井教授：そうですね。

《満州語口語の二項対立子音③》

安井教授：最後に愛新覚羅 烏拉熙春（1992）をみます。これは、黒龍江省の満州語口語の記述です。破裂音と破擦音の、/p/と/pʰ/、/t/と/tʰ/、/k/と/kʰ/、/tʂ/と/tʂʰ/、/tʂ/と/tʂʰ/を二項対立子音として挙げます。前者を弱子音、後者を強子音とも呼びますが、弱子音は無気音で、強子音は有気音です。有気と無気が主要な区別であり、有声と無声には普遍性は無いとします⁶。

佐藤久美：清格爾泰（1982）の調査結果とほぼ同じですね。清格爾泰（1982）は/tʂ/と/tʂʰ/、/tʂ/と/tʂʰ/を、一つの音韻としたのですが、愛新覚羅 烏拉熙春（1992）は二つの音韻とします。

山村健一：音韻は、解釈ですから研究者によって異なるのでしょうか。音韻観念としては、{p}と{pʰ}、{t}と{tʰ}、{k}と{kʰ}、{q}と{qʰ}、{tʂ}と{tʂʰ}、{tʂ}と{tʂʰ}としておけば良いのではないのでしょうか。これらの主要な区別は、気音の有無にあります。

佐藤久美：ところで、これらの満州語では、漢語音の ts- tsʰ- s-をどのように処理しているのでしょうか。

《満州語口語における漢語音の ts- tsʰ- s-①》

安井教授：服部四郎・山本謙吾（1956）は、中国語からの借用語として、tʂis（池子、尺子）を挙げます。「子」は tʂiのような音であったはずですから、これを新疆の満州語では s で受け取ったことがわかります。これ以外に情報はありません。

⁶ 「在現代滿洲語的輔音系統中，輔音應該分為送氣輔音和不送氣輔音兩套對立的音位。因送氣或不送氣，往往是區別一個音位的首要標誌；而清或濁，却没有那麼普遍性的界線，特別是許多場合濁輔音還常常清化。」（41 頁）。

《満州語口語における漢語音の ts- ts^h- s-②》

佐藤久美：清格爾泰（1982）はどうでしょう。

安井教授：漢語の ts- と ts^h- の発音について興味深い報告があります。漢語を話すことができる人は、借用語音として運用できるとのことです。もっとも、一般の人は、漢語音 ts^h- と満州語音の s は大差なく、また漢語音 ts- と満州語音の z (s に対応する有声の摩擦音) は大差ない、と考えている、とのこと⁷。

山村健一：実例を紹介してください。

安井教授：付録として語彙の一覧表があります。そのなかから、漢語からの借用語と思われるものを挙げます。参考に満州語文語を付します。

va:zui くつ下 (<漢語の袜子[ua tsɿ])	満州語文語 wase
zaor ナツメ (<漢語の棗[tsau])	満州語文語 soro
suanda: ニンニク (<漢語の大蒜[ta suan])	満州語文語 suwanda
sui 罪 (<漢語の罪[tsui])	満州語文語 sui
luuz 楼 (<漢語の楼子[lou tsɿ])	満州語文語 leuse
ly:zi ロバ (<漢語の驢子[ly tsɿ])	満州語文語 ナシ
ciaŋz 箱 (<漢語の箱子[ciaŋ tsɿ])	満州語文語 ナシ
ganza 食堂 (<漢語の館子[guan tsɿ])	満州語文語 ナシ

山村健一：漢語の ts- はほぼ有声摩擦音の z となり、漢語の s- は s となることがわかります。漢語の ts^h- の例が無く残念です。

《満州語口語における漢語音の ts- ts^h- s-③》

佐藤久美：愛新覺羅 烏拉熙春（1992）はどうでしょうか。

安井教授：老人の s の発音は、“アクセントのある”音節で [s^h]（気音が明瞭）であり、漢語からの借用語の ts^h は、満州語の有気の[s^h]に近く、s^h で置き換えるとします⁸。たとえば、

s ^h u 醋 (<漢語の醋 ts ^h u)
s ^h iwui ハリネズミ (<漢語の刺猬 ts ^h i ^u ei)

山村健一：漢語の ts- はどのように借用されるのでしょうか。

安井教授：次の例があがっています。参考に満州語文語を付します。

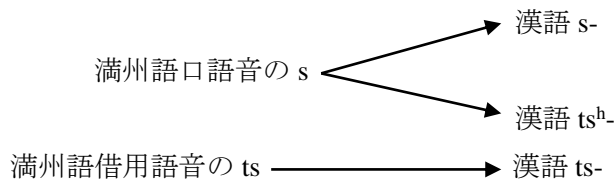
⁷ 「至于剩下的 (ts) (dz) 兩個音，只有掌握了普通話語音的人纔作為借詞音在運用。平常在一般人的心目裏，ts 與 s、dz 與 z 没有多大區別，……。」(253 頁)

⁸ 「s 的送氣程度在諸擦音中是最強的，它不僅出現在詞首重讀音節，就是在其他位置的重讀場合，送氣特徵也一樣明顯。」「一些老年人把漢語借詞的聲母 ts^h、tɕ^h、ʃ 等與滿洲語送氣的 s^h 相近的音一律用本族語的 s^h 取代了。」(44 頁)

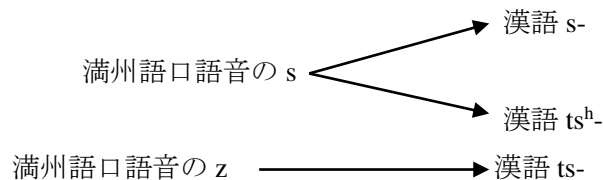
maitsiva コムギ粉 (<漢語の麦子+満州語の γva うどん粉)
 満州語文語 maiseufa
 xuitsipai カブ (<漢語の回子白) 満州語文語 huise 回子 (回教徒)
 suitsi 棒、ばち (<漢語の槌子)
 saitsi ふるい (<漢語の篩子)
 vatsi くつした (<漢語の袜子) 満州語文語 wase
 siwui ([shiwui]) ハリネズミ (<漢語の刺猬 ts^hiuəi)
 sifan 四方 (<漢語の四方 sifan)

山村健一：漢語の“子 tsⁱ”の ts-を、そのまま借用語音 ts として受け入れていますね。他方、漢語の“四 sⁱ”の s-と“刺 ts^hi”の ts^h-は、満州語の s で受け入れています。以上を図式化し、契丹小字の用法と並べると、次のようになります。

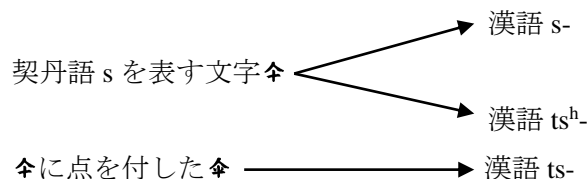
■愛新覺羅 烏拉熙春 (1992)



■清格爾泰 (1982)



■遼朝の契丹小字



佐藤久美：満州語も契丹語も、問題の二項対立子音が気音の有無により対立していたとして良いならば、その結果として、漢語音 ts- ts^h- s-の表記のパターンも同一となっても不思議ではありませんね。

山村健一：漢語の“子 tsⁱ”を、満州語で se や ze や tsⁱとするのは、なぜでしょうか。

安井教授：借用語は、異なる時代のものが混在して層をなしているのがふつうです。日本漢字音でも、“子”の呉音と漢音はシで、唐音はスです。おそらく、満州語文

語と同じ se が古く、ze や tsī のほうは、比較的に新しい借用語音なのでしょう。
 佐藤久美：ところで、満州語文語を勉強している者からすると、黒龍江省に、口語の s を比較的強い気音をとまなう [sʰ] で発音する人たちがいる、とする報告は意外でした。

《アルタイ諸語の s の音質》

安井教授：そうですね。第3回の勉強会のときに紹介した Svantesson, Jan-Olof [et al.](2008) によると⁹、モンゴル国の中心的な言語であるハルハ方言の s も [sʰ] であるということです。それだけでなく、内蒙古の中心的な言語であるチャハル方言の s も歴史的には [sʰ] であったとのこと。

佐藤久美：チャハル方言でも [sʰ] であった、とはどういうことでしょうか。

安井教授：ハルハ方言の tʰatʰ(引く)を、チャハル方言で tatʰ とするのはよく知られた現象です。これは第2番目の有気音 tʰ の影響(異化作用)で語頭の有気音 tʰ が無気音の t となったものです(有声音化したという書き方の文献もある)。

古モンゴル語	ハルハ方言	チャハル方言
tʰatʰa(引く)	tʰatʰ	tatʰ

同様に、ハルハ方言の tʰʷs(脂肪)をチャハル方言で tʷs とします。これは、第2番目の子音である摩擦音 s の影響で、語頭の tʰ が t となったものです。

古モンゴル語	ハルハ方言	チャハル方言
tʰʷosun(脂肪)	tʰʷs	tʷs

このように、チャハル方言の s は、tʰ などの有気の破裂音や歯擦音とグループをつくるわけです。s と tʰ などが一つのグループであるならば、チャハル方言の s は、現在ではふつうの s ですが、歴史的には tʰ と同様に、強い息を伴った tʰʷsʰ(脂肪)のような音であったと推定できるわけです。そのように推定すると、s による異化が無理なく説明できます。

山村健一：チャハル方言以外に同様の異化がおこる方言はないのでしょうか。

安井教授：この本では次の方言を挙げます。

古モンゴル語	モンゴル方言	サンタ方言	ボーナン方言	康家方言
kʰøkʰe(青い)	kʰuko	kʰukie	kʰuko	kʰukʰu
sykʰe(斧)	suko	sukie	ške	suku

佐藤久美：康家方言の kʰukʰu 以外は、第2番目の子音が異化をおこして無気音となっていますね。

⁹ Svantesson, Jan-Olof [et al.](2008) *The phonology of Mongolian*. Oxford University Press.

《グラスマンの法則》

山村健一：モンゴル語の異化は“グラスマンの法則”と同じですね。

佐藤久美：“グラスマンの法則”ってなんですか。

山村健一：先日、言語学の講義で“グラスマンの法則”（1863年）の話がありました。

それによると、インドヨーロッパ祖語の再建において、法則と呼ばれるものに三つあります。グリムの法則、ヴェルネルの法則、それとグラスマンの法則です。グラスマンの法則は、一つの語根のなかで、同時に二つの帯気音（=有気音）は許されず、必ず一方が異化されるというものです。ですから、*bhandh-*は許されず、*bandh-*か *bhand-*になるというものです¹⁰。そうしますと、近接する複数の有気音が異化をおこすモンゴル語の現象と同じです。

安井教授：いいところに気づきましたね。そのとおりなのですが、グラスマンの法則と同じだという点については、すでに Svantesson, Jan-Olof [et al.](2008)に指摘があります。

《近接する有気音の異化と発音労力の軽減》

佐藤久美：近接する有気音の間で“異化”がおこることなのですが、なぜ異化がおこるのでしょうか。

安井教授：異化という用語を使用する前提として、言うべきことはあるのですが、ついつい説明をせずに済ませてしまいました。さきほどのグラスマンの法則について、有坂秀世氏の『音韻論』に興味深い言及があります。それによると、有気音は大きな努力（注意力）が必要で、それが近接して複数現れると、どちらか一方の有気音に対する努力（注意力）おろそかになり、比較的弱い有気音か或いは全くの無気音となる傾向が生じて、このような音に新たに接する小児は、無気音として習得する、というのです¹¹。

¹⁰ 風間喜代三『言語学の誕生 一比較言語学小史一』岩波新書。147—149頁参照。

¹¹ 「次に、原始インド語の出気音韻 (kh, ch, th, ph, gh, jh, dh, bh) は、同じ音節の終又は次の音節の頭に出気音韻の来る場合には、すべて無気音韻 (k, c, t, p, g, j, d, b) を以て置き替へられた。(例へば *dhadhāti* > *dadhāti*) 思ふに、出気音韻は、いづれもその実現に際して多大の努力（従つて注意）を要するものである。それ故、二つの出気音韻が相接近した位置に現れる場合には、両者共に完全に実現されることは甚だむづかしい。その一方に注意を一層多く向ける時は、必ず他方に対する注意が多少怠られる。少しでも注意（努力）がおろそかになれば、出気音韻の特徴はもはや完全には発揮され難い。それ故、上に述べたやうな条件の下では、出気音韻は一般に不完全に、比較的弱い有気音か或は全くの無気音の形で実現される傾向が有つたものであらう。この傾向が社会全体を通じて著しくなつたために、その時代に新に言語を習得する小児たちにとっては、この位置に現れる無気音の或者が他の位置に於ける出気音（出気音韻の実現たるもの）と同じ音韻観念の実現であることを、正しく認識することが困難になり、且この位置に現れる無気音の中で無気音韻の実現であるものと出気音韻の実現であるものとを弁別することが出来なくなつて、結局これら（この位置に現れる無気音）を皆一様に無気音韻の実現として認

山村健一：努力（注意力）がおろそかになる結果ということですが、これを積極的に表現すると、発音における労力（注意力を含めて）の軽減ということですね。

安井教授：そういうことです。

《異化の位置とアクセントの位置》

佐藤久美：でも、労力の軽減の対象が、チャハル方言では第 1 番目の有気音^{ゆうきおん}で、他の方言では第 2 番目の有気音となっています。その違いはどうして起こるのでしょうか。

安井教授：一般論として、音の変化がなぜおこるかということについて、有坂秀世^{ありさかひでよ}氏の『音韻論』^{おんいんかんねん}に言及があります。それによりますと、強音の有る位置では音韻観念は比較的完全に実現されるけれども、強音の無い位置では不完全に実現される、ということですよ¹²。

山村健一：“強音の有る位置”を“アクセントの有る位置”と読み替えて良いのでしょうか。アクセントには、英語のような音の強弱のアクセントや、日本語のような音の高低のアクセントや、トルコ語のような強さと高さを兼ね備えたアクセントがあります。

安井教授：それでいいと思います。

山村健一：そうしますと、チャハル方言のばあいは、「第 1 音節（アクセント無し）＋第 2 音節（アクセント有り）」というアクセントの型を持っていた時代に異化がおこり、それ以外の方言のばあいは、「第 1 音節（アクセント有り）＋第 2 音節（アクセント無し）」というアクセントの型を持っていた時代に異化がおこった、と考えると良いのでしょうか。

安井教授：理屈の上ではそうとも考えられますね。それでは今日は、満州語の口語の話だけで終わってしまいましたが、このくらいにしておきましょう。

識し、且そのままの形で記憶してしまつたものであらう。」(159—160 頁)。*「出気」は帯気及び有気と同一。

¹² 「さて、日常の発音に際して、音韻観念は、強音の有る位置では比較的完全に実現されるけれど、強音の無い位置ではただ不完全に実現されるに過ぎない。それ故、強音の位置が各語について定まつてゐるやうな言語では、もし何らかの事情で音の強弱の差が極めて著しくなるやうな傾向が社会全体の上につつたとすれば、強音の無い位置では、音韻観念が常に極めて不完全にしか実現されず、時には相異なる二つ以上の音韻観念が殆ど同じ形で実現されることも有り得る故、新に言語を習得する小児にとっては、それが如何なる音韻観念の実現であるかを正しく認識することが困難になる。」(134—135 頁)。